

放浪

己の業の深さにぶちのめされて

他人の^{ひと}‘自然’に膝を折って

僕は何時でも‘幸福’の一步手前で

みじめにすすり上げて泣きじゃくり

涙でぼろぼろに崩れて疲れ果て

遂に敗北して立ち上がり

回れ右して、振り返り振り返り歩み去る

いくら彼等の前で道化た踊りを舞ってみても

自分が差し出した両手に恐怖して

彼等の微笑の中に哀しい希望を見出して

もう何もかもがガラガラと崩れ去り

その瓦礫の山の中にただひとつ残り立つ碑に

絶望と刻まれた碑にしがみついてしまい

真蒼になって踊りながら退出する

羨望の果ての哀しみが僕を押し戻す

恐怖の果ての憎悪が僕を追放すべくはね返ってくる

ああ、またも僕はこそこそと逃げ出すのだ

人々の楽しげな笑いの中から

温もりに満ちた生活の中から

(1982.7.6)